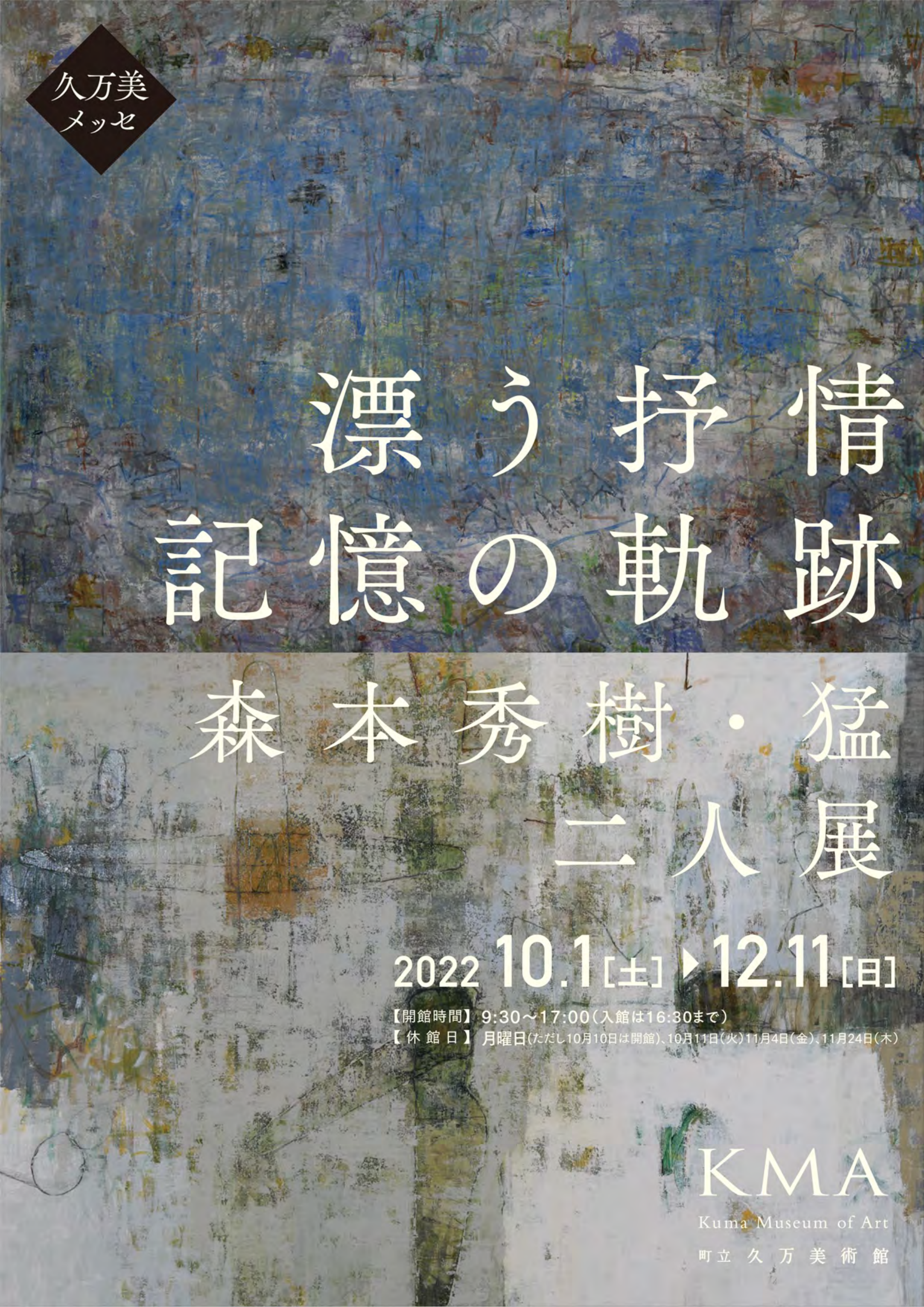


久万美
メッセ

漂う抒情
記憶の軌跡

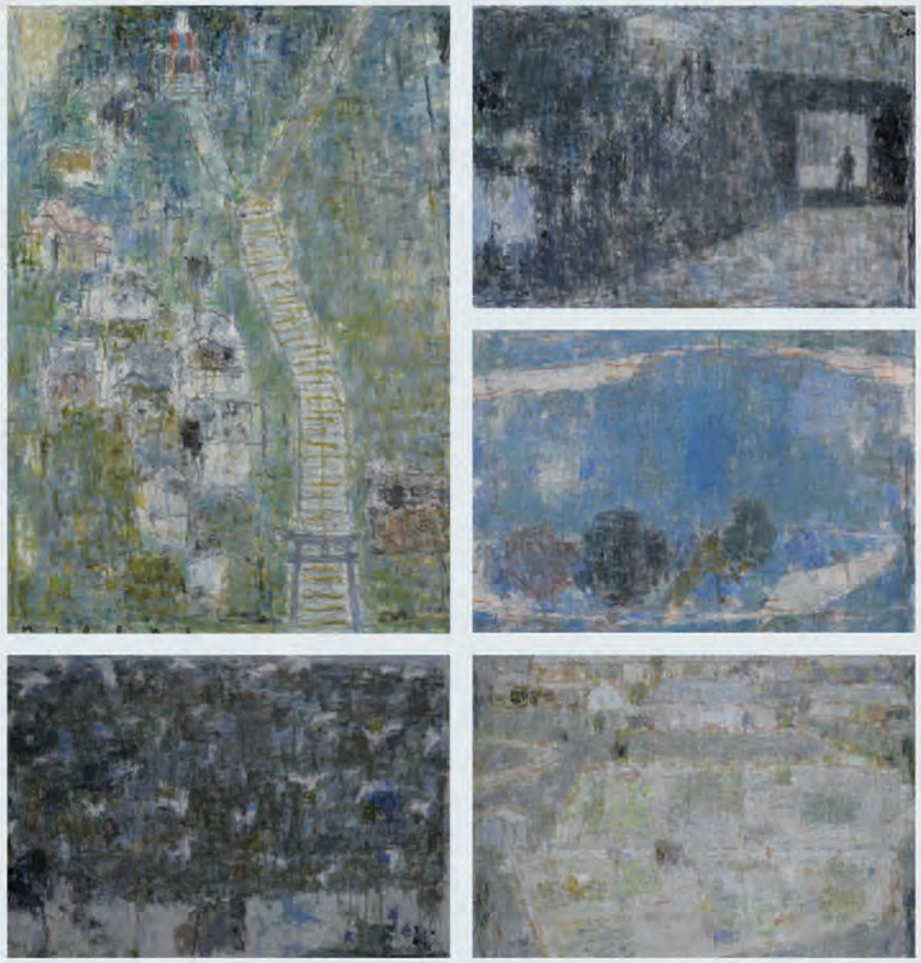
森本秀樹・猛
二人展

2022 10.1［土］▶12.11［日］

【開館時間】9:30〜17:00（入館は16:30まで）
【 休 館 日 】**月曜日**（ただし10月10日は開館）、10月11日（火）11月4日（金）、11月24日（木）

KMA
Kuma Museum of Art
町立久万美術館

近代日本洋画　抒情の系譜



森本秀樹
❶『赤染様への階段』2022年　❷『汽水域に集まる鳥』2018年
❸『ガード下回想』2020年　❹『八月の海』2019年　❺『集落』2016年

以前、「画家の詩・詩人の絵」という展覧会を企画した。これは画家の詩魂、詩人の絵心を紹介すべく、それぞれの絵と詩を並べたものである。

展覧会のサブタイトルは「絵は詩のごとく、詩は絵のごとく」とした。周知のごとく「詩は絵のごとく」は古代ローマの詩人ホラティウスの著書「詩について」の有名な一節である。この言葉は、16世紀に「絵は詩のごとく」と読み換えられ、近世の絵画論に大きな影響を与えた。以来、詩と絵画は「姉妹芸術」であるとされた。

一方、中国では宋代より詩画一致論が盛んとなり、北宋の詩人、蘇軾の「詩中画、画中詩」は文人、画家の手本となった。日本では室町時代より、一幅の山水画に詩が書き込まれる詩画軸が流行した。漢詩、和歌が画賛として書かれ、後に俳句を賛とする俳画も多くみられた。画賛の歴史は、絵画と詩が本来切り離せぬものであることを示している。

このように西洋でも東洋でも詩と絵は密接な関係にあった。しかし、近代に入り西洋ではその関係が大きく変わる。そのきっかけとされるのが、レッシングの「ラオコオン」である。サブタイトルに「絵画と文学の限界について」とあるこの著作によって、文学と絵画の表現機能の違いが改めて指摘された。絵画は「視覚芸術」（空間芸術）、文学は「言語芸術」（時間芸術）であると峻別され、長い間寄り添ってきた姉妹は自立を余儀なくされたのである。以後、モダニズムの流れにおいて色彩、線、形体といった絵画を構成する機能がさまざまに論じられ、絵画独自の表現が試されるようになる。

日本が西洋画を学んだ明治期は、既に西洋では「絵は詩のごとく」の時代は終わり、美術は文学からの自立を進めていた。工部美術学校が開校する二年前には印象派が登場している。それまでの「山水画」、「名所絵」の代わりに「風景画」が新しく生まれ、胸中山水の代わりに写実が求められた。和歌に詠まれた歌枕を描くのではなく、現実の世界を描くことが基本となるのである。以後、絵画における文学性の価値は大きく後退し、文学的に修辞された絵画は、「甘い」とされた。絵画の詩情性、文学性を専門的に論じたものも近代以降、現在まで極めて少ない。せいぜい挿絵の論考が散見されるばかりである。

しかし、近代日本美術史を彩る画家の中には、明らかに詩魂の画家、と呼べる者たちが少なからずいる。この詩魂の画家たちの系譜を紹介したいと考え、冒頭の展覧会を企画した。ここでは詳述を避けるが、彼らの詩情の発露の根底には、日本古来よりある「寄物陳思（ものによせておもいをのぶ）」の感情が強く揺曳する。日本独自のアプリオリな主客未分、主客融合のアニミスティックな精神が発動するのである。例えば風景画にしても西洋では客体化し理想化するが、日本では自己に取り込み、風景そのものを抒情するのである。

森本秀樹、森本猛は、この日本独自の詩魂・抒情の画家たちの系譜に位置づけられる。二人の作品はそれぞれの個性の違いを見せながら、対象を内面化し、同化することで、優れて心象的な内部映像を紡ぎだす。その内部映像は、土沢時代の萬鉄五郎、蝶と貝を描いた三岸好太郎、長谷川濬二郎の静謐な詩情絵画、山口薫の孤愁、少年シリーズの香月泰男、松本竣介、松田正平等々の作品世界に深いところで通底する。

「詩がぼくを支えてくれる」（山口薫）というように、優れた抒情画家とって、詩魂は自己に直結した内部映像の純度を上げ、結晶化させるのに必要不可欠なものなのである。

「30年も置き去りにしていた宿題をやっと思い出したように『宇和島』の制作に着手した」。こうして森本秀樹の宇和島シリーズは始まった。ナイーブな半具象絵画で定評のあった森本だが、「宇和島」を描くようになって、それまで封印し、記憶の奥底で発酵していた心象風景が形を結んだ。森本は民俗学者の宮本常一に私淑している。宮本は権力者ではなく「常民」の生活にこそ歴史の原像があるとした。庶民の日々の暮らしを丹念に調査し、風景はそこに生活する人々の日々の営みによって作られるとした。その視点は森本にも引き継がれている。市井の暮らしに強い共感を寄せ、少年期の記憶の映像と重ねることで、見慣れた風景は深い情感を湛え、郷愁と哀感を孕む。そこには戦争で深く心身に傷を負った父親と過ごした遠い記憶も滲む。柔らかく微光を放つ深みのある色彩、記憶の糸を折り重ねたような独自のマチエールが深い詩情を奏でる。その絵は、哀歌（詩）にも通じ、森本秀樹のブルースでありエレジーとなっている。

森本猛は最初、麻生三郎の強い感化を受けた。武蔵野美術大学の恩師である。麻生の影響から離れたのは、松山で聾学校の教員となってから。生徒が描く絵の強さ、美しさに感動し、一年間それを写し取った。これがきっかけで、自分が求める絵の方向性が見えてきた。「あの子たちに出会っていなければ、今の僕の絵は生まれなかった」と語る。画面は次第に抽象的となり、フォルムは柔軟になる。子供の頃より見てきた宇和島の風景を、確かな手触りをもって表現することを目指した。それは、潮風や雨の匂い、山に吹く風の音など、視覚だけではなく、五感を感じさせる絵画である。その感覚はまた、記憶の底に眠る原風景を呼び覚ますものでもあった。その後、移った熊本では盲学校の教師となる。部分を触ることにより、全体（世界）を認知する生徒の姿に、学ぶことが多かった。それまで、光、風、音色のイメージを色面、フォルムを構成的に表現していたが、「さらに絵をシンプルに、自分と絵が対話するように」変えていく。画面はさらに心象性を増し、融通無碍たる東洋的抽象性が表現されている。それは敬愛する画家、坂本善三の絵画世界にも通じるものである。

久万美術館で開催される二人展では近作、新作を中心に構成される。生まれ育った宇和島の自然と風景を揺籃とし、それぞれの詩心を育んできた二人の画家。その豊かな詩情がから生まれる、滋味あふれる絵画世界がみられるに違いない。

土方明司・川崎市岡本太郎美術館館長

久万美
メッセ

漂う抒情
記憶の軌跡

森本秀樹・猛
二人展

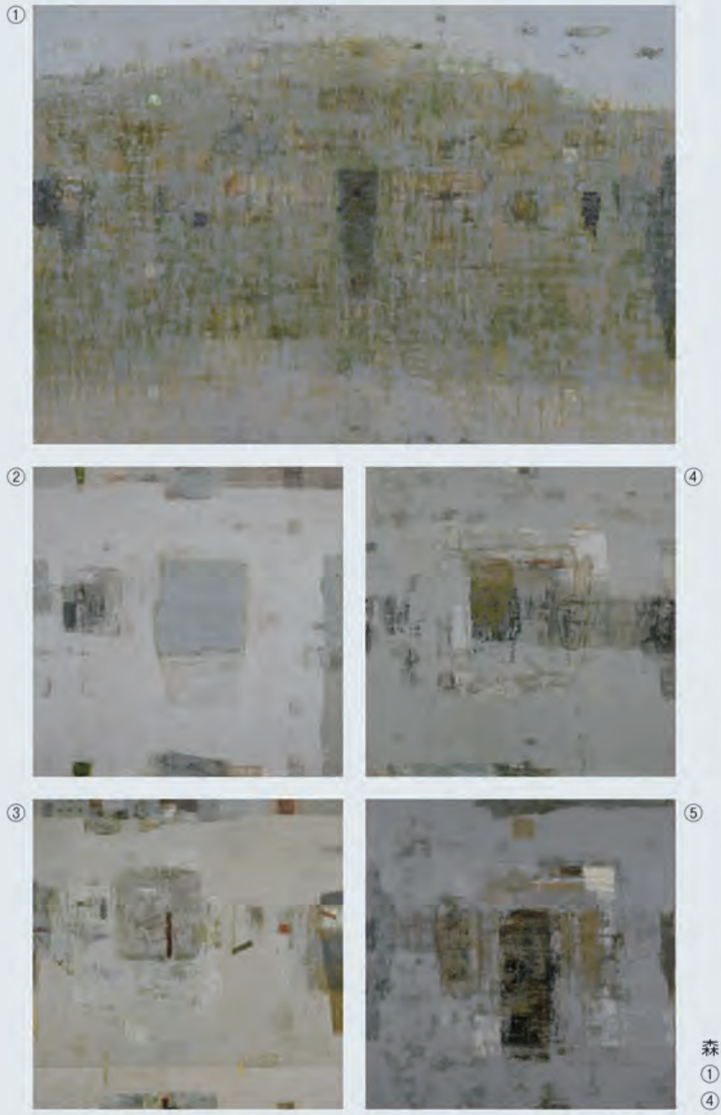
私の描く風景は、幼少期に父と過ごした宇和島の記憶の奥の情景です。その記憶は長い刻を経て、余計な物が排除され、色や形まで程好くボンヤリとしてきて、僅かな詩情だけが漂っています。

私は昔から西洋画より日本の絵に興味があり、造形的に弱く思われがちな抒情的空間や引算的思考に寧ろ魅かれました。抽象と具象の循環を経て、描き過ぎない描写に拘りながら、粗野な筆跡や簡素な線を生かした俯瞰的画面に普遍の情景を探して来ました。

これからも詩情の赴くままに、記憶の奥の情景を熟視しながら表現を深め、日本人の油彩画の系譜に連なる作家の一人として、次の時代に繋げていきたいと思っています。

森本秀樹

1951　愛媛県宇和島出身
1971　武蔵野美術短大油絵専攻卒業
1977　千葉県展受賞（77～85年出品）
1990　上野の森美術館大賞展出品（92年賞候補、93年佳作賞）
1991　昭和会展出品（92年出品）
1999　日本国際現代美術展（NICAF）出品（01年出品）
2003　森本秀樹画集『宇和島』刊行
2006　コレクターによる森本秀樹展－宇和島－（東京、Gallery　KANI）
森本秀樹展－記憶のUWAJIMA－（宇和島生涯学習センター）
2007　森本秀樹展　父の見ていた風景－宇和島－（長野、梅野記念館絵画館）
森本秀樹展（愛媛、畦地梅太郎記念美術館）
2014　斎藤実コレクション－森本秀樹展－（東京、Galleryゴトウ）
森本秀樹展（神奈川、museum from winds）
2016　森本秀樹展（松山、ミウラート・ヴィレッジ）
現在　無所属、2010年よりアトリエを宇和島に移す



森本猛
①『季の想い』2022年　②『周りの気配』2020年　③『周りの気配』2021年
④『周りの気配』2020年　⑤『周りの気配』2021年

子供のころに感じた思いはいつまでも忘れないものだ。遊びながら季節や身の周りの空気を身体中で感じ取っていた。私の絵の原点はここにあるのではないか。何を描きたいのかわからず悩みながらも描き続けてきたが、ようやく自分の作品に答えらしきものが見えてきたような気がしている。私の中の私に向き合うこと…。

今回の展覧会では、この4～5年の作品を発表する。以前には見られなかった画面に表れる四角い形は、周りの気配を気にするようになった自分自身だろうか。漂う空気に何とも言えないやるせなさを感じている。教職を退いた直後の熊本地震やその後に続くコロナ禍を受け止めることしかできない現実に初めて死を意識するようになった。いつ死んでもおかしくはない。日々、変わりなく過ぎていく時間が私に残された時季を刻んでいる。いつまでも時季を刻むことができるようにゼンマイを巻きながら、ひたむきに絵を描いていく。

森本猛

1956　愛媛県宇和島市生まれ
1980　武蔵野美術大学油絵学科卒業
1980　松山に移り住む
1991　熊本に移り住む
現在　無所属、熊本で制作活動を展開
「森本猛　-季の想い-」展2022（宇和島、畦地梅太郎記念美術館）
「楽しむ空間　書に遊び　絵に想う」展2019（熊本、宇城市不知火美術館）
「Up and Coming展　オーガフミヒロ、坂本龍彦、森本猛」2018-19
（松山、ミウラート・ヴィレッジ）
「森本秀樹、森本猛」二人展1990,97,00,04（東京、熊本、松山）
公募展
「四万十川絵画展1992（高知）」「第1回北の大地展1996（北海道）」
「別府現代美術展1996（別府）」「青木繁記念大賞展1997,98,01（久留米）」
「アート大賞展1993～01（熊本）」「ビエンナーレKUMAMOTO展2002～10（熊本）」
「別府・アジアビエンナーレ展2007」「第16回英展2007（田川市）」他

久万美術館は現代美術を中心にして、愛媛にゆかりのある作家を取り上げる展覧会「久万美メッセ」を開催しています。今回は宇和島出身の洋画家、森本秀樹（もりもとひでき）・猛（たけし）兄弟を取り上げます。詩心を持った（抒情を持った）彼らの描く作品は、豊かな自然や人との繋がりの中で過ごした幼い頃の記憶が核となり、時を経て浄化された表現となって、失われた自然、薄れてしまった人と繋がりを思い起こさせます。

❶

❷

❸

④

⑤

⑥

森本秀樹
❶『月が笑ってる』2021年　❷『懐かしい匂い』2018年　❸『汽水域』2018年
表面図版 上『ユキの生まれたT浦』2021年

森本猛
④『佇む』2022年　⑤『風まかせ』2022年　⑥『時季の流れ』2022年
表面図版 下『時季を刻む』2021年

【観覧料】 一般500(400)円、高大生400(320)円、小中生300(240)円
※( )内は20名以上の団体料金
※高齢者(65歳以上)・身障者・療育割引の方は証書・手帳等の提示で半額。

【主　催】 町立久万美術館・久万高原町
【後　援】 愛媛新聞社・愛媛CATV・南海放送・テレビ愛媛・あいテレビ・愛媛朝日テレビ・FM愛媛・宇和島ケーブルテレビ・愛媛県・愛媛県教育委員会・松山市・松山市教育委員会・宇和島市・宇和島市教育委員会・久万高原町教育委員会

■注意事項
※本展覧会開催中は、井部コレクション等の収蔵作品の展示はございません。　※展覧会の会期および関連事業は、新型コロナウイルスの影響により変更になる可能性があります。
※新型コロナウイルス感染防止対策のため、ご来館の際はマスクの着用、消毒、検温のご協力をお願いいたします。またお名前・ご住所・ご連絡先を控えさせていただきます。

関連事業

ギャラリートーク「森本秀樹・猛の作品について」 10月2日(日) 14:30〜16:00

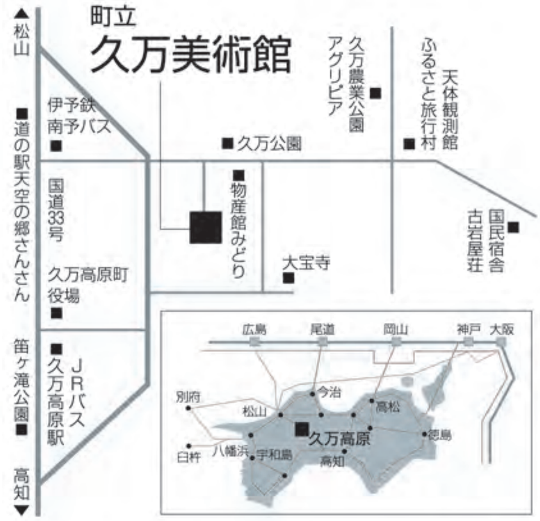
講師: 土方明司(川崎市岡本太郎美術館館長)
森本秀樹(出品作家・愛媛県)　森本猛(出品作家・熊本県)
場所: 町立久万美術館　**参加費:** 無料　※要観覧券

ワークショップ「Let's アクション！みんなで作ろうコマ撮りアニメ」

11月3日(木・祝) 10:00〜14:00頃まで
講師: ハンブンコ(チェコアニメ作家・美術家の山内知江子と、振付家・ダンサーの得居幸による
パフォーマンスユニット) 中ムラサトコ(ボイスパフォーマー)
場所: 町立久万美術館　**参加費:** 1人700円(3歳以下無料) 親子20組程度 40名まで／要申込み
申込先: ツインクル・プラン
メール twinkleplan.info@gmail.com 電話 090-9556-3139 (入江)

学芸員解説　10月10日(月・祝)、11月23日(水・祝)　各14:30〜

講師: 当館学芸員　**参加費:** 無料　※要観覧券



■[JRバス]松山から70分(ほぼ2時間毎、土・日曜・祝運休あり)
予讃線松山駅から久万高原行「久万中学校前」下車徒歩約10分

■[車]松山市内から国道33号線で約50分、高知市内から約2時間
松山自動車道松山ICから国道33号線を高知方面へ約30分、久万中学校前交差点を左折、県道12号(西条久万線)を0.8㎞東進、右側
駐車場45台(無料)

KMA
Kuma Museum of Art
町立久万美術館

〒791-1205
愛媛県上浮穴郡久万高原町菅生2番耕地1442-7
電話：0892-21-2881 / FAX：0892-21-1954
https://www.kumakogen.jp/site/muse/